

ハーバード大卒で元東大大学院研究生の米国人ベンジャミン・トバクマンさん(27)が、実体験を基に書いた、日米両校の比較本が東大で売れている。

トバクマンさんによる比較論は1年前、「こちら特報部」でもご紹介したが、数ある東大の関連本の中で、この本が東大生に人気のワケは一。

比較本 在校生に人気

東大本郷キャンパス(東京都文京区)の生協書籍部。辻谷寛太郎副店長は、売り切れ後、再入荷したばかりの「カルチャーショック ハーバードVS東大」(大学教育出版)を目立ちやすいレジ前に平積みした。「東大関連本はある程度、売れますが、今回は予想以上」とニコリ。九月の人文書部門では、本郷キャンパスで二位、駒場キャンパス(目黒区)で一位と好調だ。「基本的には体験記。読みやすさが人気の理由では」。同書はハーバード大の期末試験前夜に恒例のストリーキング大会を「『表現の自由』の象徴」と持ち上げる一方、東大については、ゼミで教員側が自説を押しつけがちで議論が活発化しないなどとして「ヒエラルキーを感じる」と切っ

ハーバード VS 東大



ベンジャミン・トバクマンさん

「面白かった」「的を射ている」といった賛同の一方、「東大にボランティア活動がほとんどない」というのは誤り。「具体的データがなく、

東大生の男女比率が四対一で圧倒的に男子学生が多いことも「日本社会で女性には見えない壁がある」という声も聞かされた。あることを証明する一側」と記述。「最高学府の東大が変われば、日本は変わる」と主張する。こつした内容に、東大生からは賛否両論が。東大も何かにつけ注目さ

東大生協には「ハーバードVS東大」など東大関連本がずらり=東京・本郷で

れるので、必要以上に自尊心をくすべられがち」と話すのは東大教育学部を昨年三月に卒業した女性。「でも、そんな風潮に甘んじていることも、うすうす感じていて、ハーバードという別ブランドとの比較に引きつけられたのでは」。東大卒の元プロ野球選手で、現在は江戸川大学(千葉県流山市)の教授の小林至さんも何かと東大ブランドに振り回された。「東大卒として世間から注目されなかったら、実力的にはプロに入れたかったと思う。その意味で学歴を利用したこ

競争心くすぐる?

とになるが、僕はそんなつもりはなく、周りが勝手に騒いでくれた。世間が東大を必要以上に特別視している」。一九九二年から二年間、プロに在籍し、一軍登板はなかった小林さんだが、九五年に米コロロンビア大ビジネススクールに留学。東大卒の元プロ選手という肩書からキャリアアップを果たした。その小林さん、この本に人気が出るのは「分かる気がする」という。「世界の大学ランキングでハーバード大は東大より上位。自意識過剰になりがちの東大生がハーバード大に関心を持つのは当然。堅苦しい教育学の目線ではなく、学生の視線でこのテーマを選んだことが、マーケティングの勝利でしょう」。結局この本、自意識が強くて東大本も大好きな東大生の目の前に、ハーバードブランドをぶら下げて、競争意識をおおったことが、勝因らしい。

今を 読み解く

昭和女子大学教授
矢野 眞和

「入試地獄」という懐かしい言葉に代わって、「全入時代」が大学の今を語る枕詞ごぼりになった。経済力さえあれば、誰でも大学に進学できる。受験勉強をせずに入学してくる学生もかなりいる。入試天国のような時代だが、大学は「格差」と「困難」の中で、迷走している。上流の勝ち組は、改革の花火を打ち上げて元気づけたが、その基盤は脆弱だ。その一方で、定員を確保できない半分ほどの大学は、生き残りをかけた競争で疲弊している。

『早稲田と慶応』（講談社現代新書・二〇〇八年）は、「格差社会」の論壇をリードしてきた橋本俊詔が、格差の源流を教育に求めた一冊。政界・財界の目立った活躍に、人気の小中高大一貫教育が重なって、勝ち組である私学の両雄は、最近ますますその存在感を高めている。両大学の成功物語に、階層の固定化とマスプロ教育の問題を絡めながら、これからの大学が生きる道を探っている。

●弱い「大学院教育」

国立大学は法人化され、自力で調達した資金を自主運用できるようにになった。外部資金を調達する力がある一部の勝ち組国立大学も元気だ。その元気づけを紹介する本や記事も散見されるが、それほど楽観的な状態にはない。ベンジャミン・トバクマンの『ハーバード VS 東

全入時代、迷走する大学

も通底する日本の教育の弱点を知らずには済まなかった。

消える「大学」 残る「大学」

日本の学生は、学ぶ意欲が弱く、教育に「何を期待しているのか」を自覚していない。トバクマンのような留学生と比較すれば明らかだが、教師に何も期待しないのが、東大優等生のプライドだったりするから話はややこしくなる。その一方で、教師が学生に期待しているものもあいまいだ。役割は期待の集合だから、相互の期待が希薄になれば、教育の役割は見えなくなり、カリキュラム（教師の意

図）と学生をマッチングするのは難しくなる。諸星裕の『消える大学 残る大学』（集英社・〇八年）は、日本の「平均大学」に焦点をあて、平均大学にふさわしい大学教育の役割の構築を提唱している。それを具現化して、今の学生にマッチした「入試とカリキュラム」のシステムを設計しなければ、全入時代を生き残れないという。

変貌する日本の大学教授職



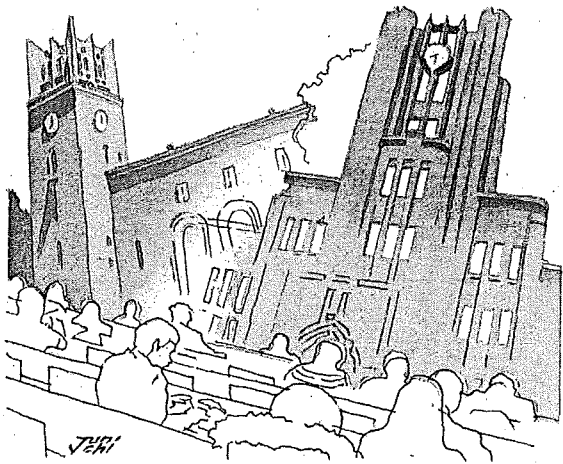
の「現代思想」（青土社）が、「大学の困難」という特集を編んだのは象徴的である。困難な経営問題を解くために導入された施策が「選択と集中」という米国生まれの経営思想だった。ところが、竹内淳論文（「日本の研究教育力の未来のために」）が的確に指摘したように米国の研究費配分は穏やかな傾斜で、層の厚い研究大学群が形成されている。要するに、全米九十位の大学でも十分な競争力をもつ資金配分になっている。日本のように一握りの少教員に資金が過度に集中する配分にはなっていない。日本の大学の実情をわきまえずに「選択と集中」という部分的経営理念をまねた日本の悲劇である。困難の誤った解決策が、格差を強化し、それが更なる困難をもたらしている。

●一握りに資金集中
教育の困難だけでなく、経営の困難も深刻だ。〇八年九月号

勝ち組も脆弱な基盤

困難に直面している大学教師は、いったい何を考えているのだろうか。有本章編著の『変貌する日本の大学教授職』（玉川大学出版部・〇八年）は、一九九二年と二〇〇七年のアンケート調査を比較して、教員意識の変化を多面的に追跡している。大学教員のモラルが衰退し、大学組織体への失望感や離脱感が強まっているという。優秀な若者に聞きたくなる。「大学教師はぜひとも就きたい魅力的な職業ですか?」

「格差」と「経営問題」の中で大学はどう生き残るのか、戦略が問われている。イラスト・よしか じゅんいち



答えがNOなら、日本の大学の未来は暗い。大学の教育と研究は、自己利益（民間市場）のお金ではなく、助けあいのマネーである税金を必要とする価値財である。その価値を説得できる言葉と政治的想像力がなければ、NOをYESに変えることはできないだろう。